

平城京左京六条三坊十四坪  
発掘調査概報

8年3月

奈良市教育委員会

## 目 次

### I 調査の経過..... 1

### II 左京六条三坊十四坪

1	検出遺構	2
2	遺物	
(1)	土器	4
(2)	瓦	8
(3)	井戸曲物	9
3	まとめ	9

### III 大安寺西中房

1	検出遺構	10
2	遺物	
(1)	土器	12
(2)	瓦	13
3	大安寺伽藍配置図について	14
4	まとめ	15

### 図版

図版 1	左京六条三坊十四坪発掘区全景	図版 5	1. 発掘区全景 2. 石列 3. 同
2	1. S B1622 2. S B1621 3. S K1624	6	1. 石列第Ⅰ群 2. 同
3	1. S E1623 2. 同	7	土器
4	大安寺西中房発掘区全景	8	瓦
付図	大安寺伽藍配置復原図	付表	大安寺出土瓦数量表、大安寺略年表
挿図	表		
第1図	発掘区位置図	第9図	井戸曲物実測図
2	左京六条三坊十四坪発掘遺構図	10	大安寺西中房発掘遺構図
3	S B1621柱穴実測図	11	石列第Ⅱ群実測図
4	S E1623実測図	12	石列第Ⅲ群実測図
5	南壁土層図	13	南壁土層図
6	土器実測図	14	土器実測図
7	瓦実測図	15	軒瓦拓本
8	軒瓦拓本	第1表	『資財帳』にみえる堂塔規制

## 例　　言

1. 本書は、奈良市が国庫補助金を受託して実施した平城京左京六条三坊十四坪の発掘調査概報である。
2. 本書には、上記の調査と関連して行った、現大安寺小学校校庭の大安寺西中房の調査結果をあわせて収録した。
3. 発掘調査にあたっては、奈良市の委託を受けて奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長 狩野久）が行った。調査期間は昭和52年9月26日から10月19日、大安寺西中房は昭和52年10月17日から10月26日である。
4. 発掘調査には、森郁夫、宮本長二郎、吉田恵二、綾村宏、安田龍太郎、中村友博、本中真が参加した。
5. 報告書の作成は、調査員全員であたり、全体の討議のもとに以下のように分担執筆した。  
I・II-1・III-1 吉田恵二、II-2-(1)・II-3・III-2-(1)・III-4 安田龍太郎、  
II-2-(2)・III-2-(2) 森郁夫、II-2-(3) 中村友博、III-3 本中真、III-4 宮本  
長二郎、綾村宏、編集 安田龍太郎
6. 遺構・遺物写真は仰幹雄が撮影した。

## I 調査の経過

奈良市立大安寺小学校は、奈良時代の官寺であった大安寺の講堂、鐘楼、西僧房などの主要伽藍の配置された場所にあたり、同校敷地内においてもたびたび発掘調査が行われ、大安寺の復原研究も大きく前進してきた。一方、近年における同校区生徒数の急激な増加に対応するため校舎の増築がいそがれてきたが、地下に重要な遺構があるため、校舎増築にも限界があり、校舎の移転が計画されてきた。今回、同校敷地西側の水田を買収し、校舎を移転増築するとともに、現在の敷地全体を運動場にかえて遺構の保全に努めることになった。

校舎の移転予定地は、平城京在京六条三坊十四坪にあたり、東三坊大路および宅地の存在が予想されるため、奈良市教育委員会では文化庁・奈良県教育委員会と協議を行い、国庫補助による学術調査を行うこととなった。奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部では、奈良市教育委員会の委託を受け、昭和52年9月26日から同年10月19日まで発掘調査を行い、掘立柱建物、井戸、土壇、溝などを検出した。本書はこの調査結果の報告書である。なお、同時期に奈良市は校舎移転とともに現校庭南端に新校舎への渡り廊下の建設を計画し、文化庁に対して史跡大安寺境内の現状変更の許可申請を提出していた。同工事は地下の掘削をほとんど行わない簡易なものであるが、当該地が大安寺西中房にあたるために、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部では奈良市教育委員会と協議し、学術資料を得るために発掘調査を実施することにした。調査は昭和52年10月17日から同年10月26日までで、大安寺西中房の基壇と礎石根石列を検出した。この調査結果についてもここに収録した。

大安寺寺境内では昭和29年の南大門・中門の調査以来、今までかなりの発掘調査が行われてきたが、これらの成果もまだ集成されていない。本書では今後の大安寺の調査研究に資するため、従来の発掘調査の成果をもとにして作成した『大安寺伽藍配置復原図』を収録した。



第1図 発掘区位位置図

## II 左京六条三坊十四坪

### 1 検出遺構

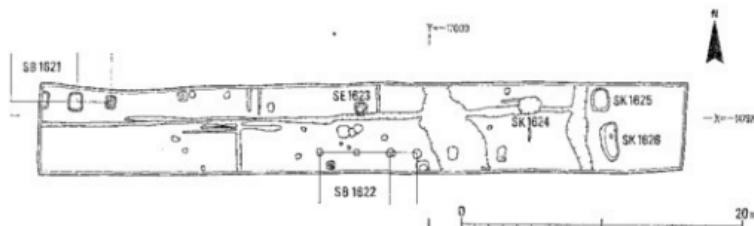
調査地は大安寺小学校と道をへだてた西側の同校 校舎移転予定地の水田で、東西80m、南北40mの範囲である。調査が始まる前にすでに2m近い厚さの盛土造成が終っており、奈良時代の遺構面までの深さを考えると相当量の排土処理が必要であるため、予定地内の東北によせて、東西長50m、南北幅10mの発掘区を設定した。しかし、盛土が深かったため、実質的に調査ができたのは、東西46m、南北6mの範囲である。盛土を除いた旧水田面から遺構面までは比較的浅く、厚さ約0.2mの水田耕土と床上の下に、奈良時代から中世までの遺物を含んだ厚さ平均0.2mの遺物包含層があり、これを除いた面で奈良時代の建物2、平安時代末期の井戸1、上塙3、時期不明の溝などを検出した。遺構面は東で高く、西で低くなっている。発掘区内での比高差は約0.4mである。遺構面の高低に反比例して、遺物包含層は東ではきわめてうすく、反対に西へ行くにしたがって厚くなっている。遺構面から下は、粘土・砂・砂利が混在した自然堆積層で、遺物を含まない。

#### (1) 掘立柱建物

発掘区内において掘形規模の異なる掘立柱柱穴31を検出した。そのほとんどが整然とした柱列をなさないが、2棟の建物（S B1621・S B1622）が復原できた。

S B1621は、発掘区西北隅で検出した掘立柱建物で、東西に並んだ3ヶ所2間分の掘形を確認した。このうち、中央の掘形規模は今回検出した柱穴中ではもっとも大きく、長辺1.3m、短辺1mの長方形で、掘形中に円形の柱痕跡を残し、柱痕跡の直径は25cmである。柱痕跡から土師器・須恵器・製塩土器が少量出土した。柱間寸法は8尺等間である。ただし、東端の掘形は西側2ヶ所のそれに比して規模が小さく、これを廂とすれば、梁行2間で、東に廂のつく南北棟と考えられる。

S B1622は、発掘区中央南端で検出した掘立柱建物で、東西に並ぶ3間分、4ヶ所の掘形を確認した。掘形は一辺0.4m内外の小規模なもので、直径15cmの柱痕跡がある。梁行2間の身舎の東に片廂のとりつく南北棟と考えられる。柱間寸法は身舎が梁行2間8尺等間、廂の出は7尺である。S B1622の柱痕跡から、土師器・須恵器・製塩土器の小片が少量出土した。



第2図 発掘追構図

## (2) 井戸

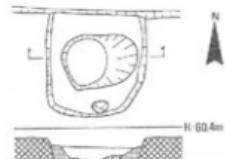
発掘区中央北寄りで、井戸 S E1623を検出した。一辺0.9mの方形の掘形の中央やや西に偏って、底板を抜いた曲物をおき、周間に凝灰岩切石や大小の自然石をつめて裏込めしている。曲物は土圧によってわずかに梢円形に歪んでいるが、もとの直径は39cmと推定され、底部から16.5cmの高さまで残っていた。深さは遺構検出面から底まで0.62mである。埋土中から瓦器、土師器、黒色土器などの土器類と、軒丸瓦、凝灰岩切石各1点が出土した。凝灰岩切石は直角二等辺三角形で短辺22.5cm、厚さ18.6cmで、階段の耳石下のはめ石であろう。また、裏込めとして用いられたものの中に凝灰岩の長方形切石が1点あり、これらの凝灰岩は本来、大安寺で用いられていたものであろう。井戸の終末は平安時代末期である。

## (3) 土 墓

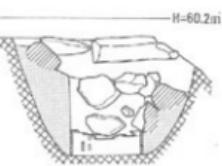
発掘区東部で土墳 SK1624・SK1625・SK1626を検出した。いずれも不整円形の浅いもので、埋土中には大小の自然石や瓦類、土器類があり、SK1624とSK1625では木炭や灰も混っていた。SK1624から土師器、黒色土器、瓦器、SK1625から瓦器、SK1626から土師器、瓦器が出土し、平安時代末期に属するものと考えられる。

## (4) 溝

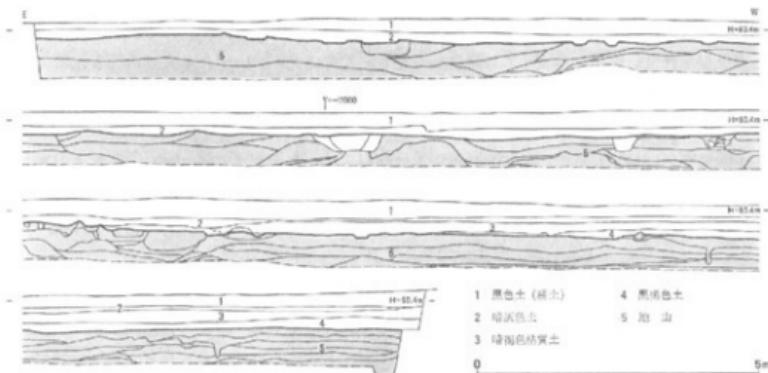
発掘区内で東西方向あるいは南北方向の素掘りの溝を検出した。奈良時代に属するものではなく、時期も不明である。



第3図 S B1621柱穴



第4図 S E1623



第5図 南壁土層図

## 2 遺 物

### (1) 土 器 (第6・7図、図版7)

掘立柱建物 S B1621・S B1622、井戸戸 S E1623、土壙 SK1624・SK1625・SK1626などの遺構や発掘区の全域に広がる包含層から、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦器、製塩土器などの土器類が少量出土した。このうち、S B1621・S B1622出土土器は奈良時代後半に属し、S E1623・SK1624・SK1625・SK1626出土土器は平安時代末期に属するものである。

#### S K1626出土土器 土壙 SK1626から上師器皿・甕、黒色土器碗が出土した。

土師器皿（1～3・6）には口径10cm前後の小型のもの（1～3）と、口径18cm前後の大型のもの（6）がある。小型品には口縁部が強く屈曲し、端部を内側へ巻きこんだ薄手のもの（1・3）と、口縁部が外反し、端部の丸い厚手のもの（2）とがある。大型品の口縁部は外反する。いずれも底部内面をなで、口縁部を横なでし、底部外面は調整しない。1は口径9.5cm、高さ1.5cm。2は口径9.8cm、高さ1.1cm。3は口径11.0cm、高さ1.4cm。6は口径18.2cm、高さ2cm。

土師器甕（7）は丸い体部と外反する口縁部からなる。口縁部は外反し、端部は内側へわざかに巻きこんでいる。口縁部を横なで、体部内外面をなでて仕上げる。外面に煤が付着する。口径18.4cm。

黒色土器碗（4・5）は平らな底部と大きく開く口縁部からなり、高台がつく。底部内面に放射状、口縁部の内外に水平なヘラ磨きがある。外面のヘラ磨きは粗い。高台は幅広く低い。内面が黒色を呈する。4は口径15.0cm、高さ5.5cm。5は口径14.8cm。

#### S K1624出土土器 土壙 SK1624から土師器皿・甕・羽釜、須恵器壺、黒色土器碗、灰釉陶器碗・瓶、瓦器碗が出土した。

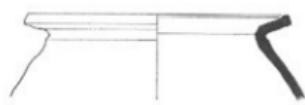
土師器皿（8～10）には口径10cm前後の小型のもの（8・9）と、口径15cmのやや大型のもの（10）とがある。小型品は口縁部が強く屈曲し、端部を内側へ巻きこんだ薄手のものである。大型品は丸い底部と外反する口縁部からなり、端部は丸い。いずれも底部内面をなで、口縁部の内外を横なでし、底部外面は調整しない。8は口径8.6cm、高さ1.5cm。9は口径10.4cm、高さ1.0cm。10は口径14.8cm、高さ約3cm。

土師器甕（17～19）は丸い体部と外反する口縁からなり、口縁端部を内側へ巻きこむもの（18）と、端部が上へ突出するもの（17・19）とがある。口縁部を横なで、体部内外面をなでて調整し、外面のなでの下にハケメを一部のこすものが1例（19）ある。17は口径25.0cm。18は口径26.0cm。19は口径14.8cm。

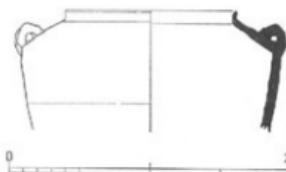
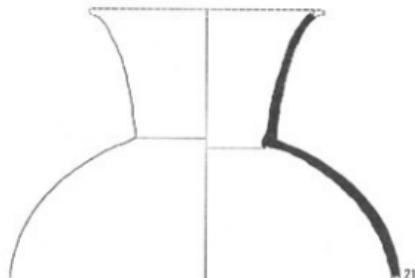
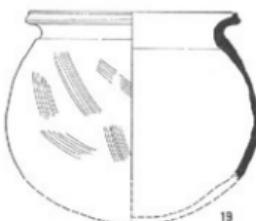
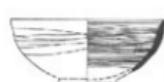
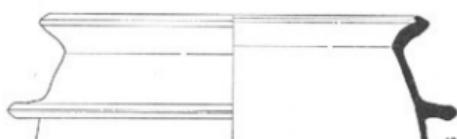
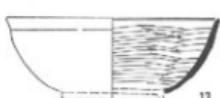
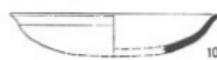
土師器羽釜（16）は甕の体部に鋸をめぐらしたもので、口縁端部は内側へ巻きこんでいる。口縁部と鋸部を横なで、体部内外をなでて調整する。口径26.0cm、鋸部外径31.8cm。

須恵器壺（22）は肩部の直線的にはった体部と直立する短い口縁部からなり、肩部に耳がつく。耳はヘラで削って面取りしたもので、直径0.4cmの円孔があく。口径12.0cm。

S K1626出土土器



S K1624出土土器



0 20cm

第6図 土器（1～3・6～10・16～19 土師器、4・5・11～13 黒色土器、14・15 瓦器、20・21 灰釉陶器、22 須恵器）

黒色土器碗（11～13）は平らな底部と内弯する口縁部からなり、高台がつく。口縁端部には外反するもの（11）と、内弯するもの（12・13）とがあり、後者には端部内側に沈線が1条めぐる。いずれも内面が黒色を呈する。口縁部外面はヘラで削って平滑にしあげている。器面の内外をヘラで磨くもの（12）と、内面のみ磨くもの（13）、ヘラ磨きのないもの（11）とがある。11の高台はうすく高い。11は口径13.8cm、高さ5.7cm。12は口径13.2cm。13は口径15.2cm。なお、このほかに内外面とも黒色をした碗がごく少量ある。

灰釉陶器碗（20）は口縁部を一部内側へ折りまげた輪花碗で、口縁部の内外に白綠色の釉がうすくかかっている。高台は断面三角形状を呈し、底部内面には重ね焼きの痕跡がのこる。口径19.2cm、高さ6.5cm。

灰釉陶器瓶（21）は肩のはった丸い体部に外反する長い口頭部のつくものである。体部と口頭部の接合は一段構成で、体部外面下半をヘラで削っている。外面全面に濃い緑色の釉があつくなっている。ほかに同形の小型品が1点ある。

瓦器碗（14・15）は内弯する底部と口縁部からなり、高台がつく。口縁端部内側には沈線が1条めぐる。内面の底部にラセン状、口縁部に水平方向のヘラ磨きがある。口縁部外面のヘラ磨きは粗い。14は口径15.2cm、高さ6.0cm。15は口径約11cm。

**S E1623出土土器** 井戸S E1623から十師器皿・羽釜、須恵器甕・高杯、黑色土器碗、灰釉陶器碗、綠釉陶器碗、瓦器碗・皿が出士した。このうち、須恵器甕・高杯、灰釉陶器碗、綠釉陶器碗はいずれも小片であり、原形はわからない。

土師器皿（24～26）には口径10cm前後の小型のもの（24・25）と、口径14cm前後のやや大型のもの（26）とがある。小型品には口縁部が強く屈曲し、端部が上へ突出するもの（24）と、口縁部が内弯し、端部の丸いもの（25）とがある。大型品は丸みのある底と外反する口縁部となる。いずれも底部内面をなで、口縁部を横なしで、底部外面は調整しない。24は口径9.4cm、高さ1.8cm。25は口径10.8cm、高さ2.1cm。26は口径13.6cm、高さ約3cm。

土師器羽釜（29）は体部に鈎のめぐるもので、口縁部は外反し、端部は内側へ巻きこんでいる。口縁部を横なしで、体部の内外をなでて調整する。口径19.4cm、鈎部外径26.0cm。

瓦器碗（27・28）は内弯する口縁部をもち、端部内側には沈線が1条めぐる。いずれも口縁部内面を水平方向に密にヘラで磨いており、底部にラセン状のヘラ磨きを施したもののが1例ある（27）。口縁部の外面には粗いヘラ磨きがあり、外面を3回のヘラ磨きによって一周しているものが1例（28）ある。27は口径14.2cm、高さ約6cm。28は口径15.2cm、高さ約5.5cm。

瓦器皿（23）は平らな底部と外反する短い口縁部からなり、端部は丸い。口径10.0cm、高さ1.5cm。

**S B1621出土土器** 振立柱連物S B1621の柱痕跡から十師器皿・碗・甕・甕・カマド、須恵器甕・蓋・甕、製塩土器が出土した。

土師器皿（35）は平らな底部と外傾する口縁部からなり、口縁端部は内側に巻きこんでいる。底部内面をなで、口縁部を横なしで、底部外面をヘラで削る。口径13.6cm、高さ2.1cm。

土師器碗（34）は外傾する口縁部の破片で、内面を横なで、外面をヘラで削ってしあげている。口径13.6cm。

土師器甕（36）は丸い体部と外反する口縁部からなり、口縁端部はわずかに内側へ巻きこんでいる。口縁部を横なで、体部の内外をなでて調整し、外面のなでの下にはかすかにハケメの痕跡を残している。口径24.2cm。

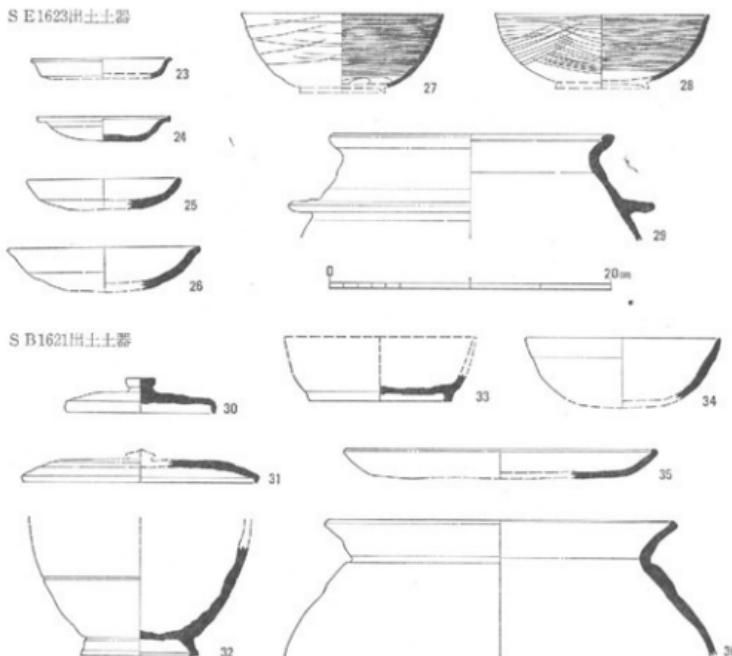
土師器壺は薬壺形の壺の底部小片、カマドはひさしの下底部破片である。

須恵器杯（33）は高台のつく底部破片である。底部にヘラ切り痕をのこす。

須恵器蓋（30・31）には平らな頂部と垂直な短い縁部からなるもの（30）と、平らな頂部とやや屈曲する縁部からなるもの（31）がある。前者には平らな宝珠つまみがつき、外面全面に緑色の自然釉があつくかかっている。30は口径10.5cm、高さ2.5cm。31は口径16.4cm。

製塙土器は胎土に多量の砂粒を含んだ粗製のものである。小片のため原形はわからない。

以上の遺構以外では、S B1622の柱痕跡から土師器、須恵器、製塙土器が少量出土した。また、包含層から綠釉陶器碗、灰釉陶器蓋の小片が出土している。灰釉陶器蓋は口径4.4cm、縁部の高さ0.5cmの小さな蓋で、外面全面に黄緑色の釉があつくかかっている（図版7）。



第7図 土器（24~26・29・34~36 土師器、23・27・28 瓦器、30~33 須恵器）

## (2) 瓦 (第8図、図版8)

出土の瓦類はごく少量で、丸・平瓦数片、軒丸瓦2点、軒平瓦2点、塙1点である。

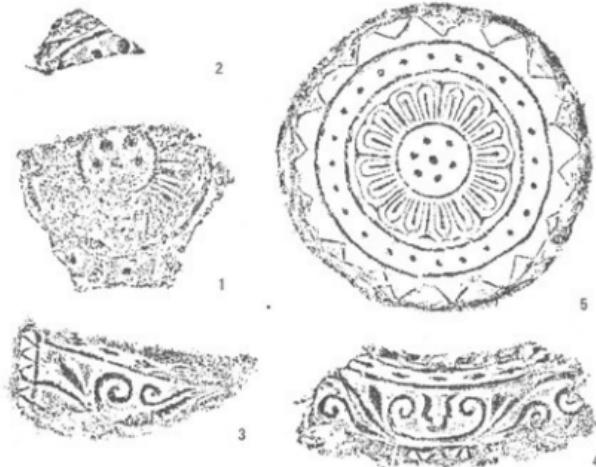
1は内区に複弁8弁蓮華文をおく軒丸瓦である。瓦当厚は4.7cmである。中房は弁区よりやや低い。蓮弁は反転を示さず平板につくる。間弁は長く伸び、界線のように蓮弁を区画する。遺存状況は悪いが、同型式の平城宮所用瓦(第8図5)でみると外区内縁に珠文を、外縁に線鋸齒文をめぐらす。平城京内で本型式に属するものは羅城門地城の発掘調査で出土している。2は外区にやや大ぶりな珠文3個を残すだけの小片である。珠文帯の外側に圓線を残すが、外縁を欠失しているので鋸齒文の有無はわからない。

3・4は同型式の軒平瓦で、均整唐草文を内区に飾り、上外区に梢円珠文、脇区と下外区に線鋸齒文をおく。大官大寺式と称せられ、大官大寺出土瓦と同様である。

さて、さきに軒丸瓦1の同範品が羅城門地城で出土していること、そしてこれが平城宮所用瓦と同範関係にあることにふれた。羅城門地城では、朱雀大路と九条大路の交差点の右京築地西側と、朱雀大路西側溝から瓦類が出土した。今回の調査では、築地を検出することはできなかつたが、東三坊大路沿いで平城宮所用瓦と同範の軒丸瓦が出土していることは、それらの瓦が官営工房で製作されたという点から考えて、京内造営に際して官が関与している部分のあつたことを示すものであろう。

なお、参考のため大安寺南門・中門地区、講堂地区、東北僧房地区で奈良國立文化財研究所が参加した発掘調査で出土した奈良時代の主要な軒瓦の一覧表を掲げておく(付表)。

(註) 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告(第1次~第3次発掘調査)』1972年3月



第8図 軒 瓦

### (3) 井戸曲物（第9図）

井戸 S E1623の井戸枠に用いられていたものである。

高さ16.5cmまで残る。底部の遺存状況はよいが、上部の傷みはひどい。底板ではなく、側板だけである。側板は厚さ0.3cmの楕の薄板を棹とじしたもので、内面には1.5cm間隔の切り込みが縦に入っている。棹のとじ穴は縦長で、平均寸法は縦2.4cm、横1cmである。側板底部には底板をとめるための木釘孔が上下2段にめぐらしている。上段の孔はやや縦長で、縦0.5cm、横0.4cm、下段の孔は正方形で一辺0.3cmである。木釘孔が2段にあるのは、最初の底板が破損したのち、その上に再度底板をとりつけたためであり、2度目の底板が破損したのちに井戸枠に転用したものであろう。



第9図 井戸曲物

## 3 まとめ

今回の調査区は、平城京左京六条三坊十四坪で、東三坊大路の西側溝と、十四坪の宅地遺構が想定される位置にあたる。発掘調査の結果、東三坊大路の西側溝は検出できなかったが、奈良時代末期の遺構を検出し、大安寺の西に隣接する区域の利用状況をつかむ資料を得た。

遺構面から下層は、粘土・砂・砂利が混在しており、この一帯が古くから河川流路にあたっていたことがうかがえた。調査区東部に想定された大路側溝も、後世の流路のために破壊されおり、検出できなかった。

奈良時代の掘立柱建物は、調査区北西隅と、中央南端で2棟分検出した。S B1621は南側柱2間のみであるが、柱掘形は大きく、柱間寸法は8尺等間で、東に廊をもつ南北棟と考えられる。S B1622は、東西の柱列を検出した。これは南北棟建物の北側柱列で、身舎2間、柱間寸法8尺で、東に廊（柱間寸法7尺）をもつ。柱掘形はS B1621に比して小さい。これら2棟の建物の柱痕跡から奈良時代後半の土器類が出土している。

平安時代前期に属する遺構は、今回の調査区では検出していない。

土塙3・井戸1は、平安時代末期の遺構である。出土した土器類は、黒色土器・土師器・瓦器が主で、数量的には土師器が最も多い。これらをみると、黒色土器・瓦器は楕で、土師器は少量の甕・羽釜を除いて、ほとんどが皿である。各遺構毎の土器類の構成をみると、黒色土器と瓦器との数量関係から、遺構に若干の時期差が考えられる。SK1626は瓦器を含まず、最も古く考えられる。S E1623とSK1624は黒色土器と瓦器を出土しており、その数量はSK1624に黒色土器が多いのに対して、S E1623は瓦器が多い。このことから、SK1624が先行する可能性がある。SK1625は黒色土器を含まず最も新しくおくことができよう。

この一帯がいつ水田となったかはわからないが、今回の調査によれば、奈良時代から平安時代末期にわたって宅地として存続していたことは明らかであろう。

### III 大安寺西中房

#### 1 検出遺構

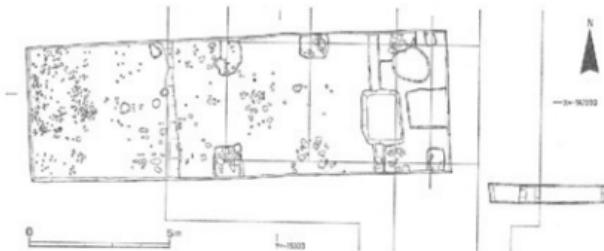
大安寺小学校校庭の南端に南北幅5m、東西長15mの発掘区、およびこの発掘区の東南に近接して、南北幅0.5m、東西長4mの東西トレンチを設定した。遺構面は、運動場整地土直下で、西中房の基壇と礎石掘付け用の根石8ヶ所を検出した。基壇は南北方向で、西中房が南北棟であることが確認された。基壇西側には石敷があり、当時の生活面であったと考えられる。また、発掘区の一部と東西トレンチを1m以上掘り下げて、大安寺創建以前の旧地表面を検出することができた。遺構面が非常に浅いこと、残存する基壇高が低いこと、根石しか検出できなかったことなどから、西中房基壇が後世にかなりの削平をうけていることが指摘できる。

##### (1) 西中房根石

発掘区東半で根石を8ヶ所検出した。根石は基壇上の同一面で検出したが、その位置と根石の個々の大小、根石の密集範囲の広狭によって大きく2群にわけることができる。

根石第Ⅰ群は、一辺約1m四方の範囲に、径30cm~10cmの自然石が密集したもので、発掘区北端で東西に並ぶ3ヶ所と、南端で東西に並ぶ3ヶ所の合計6ヶ所がある。このうち北端の西側2ヶ所と南端の西側1ヶ所の合計3ヶ所では根石を配置するための掘形を検出したが、残る3ヶ所では掘形ではなく、基壇上に直接埋まっていた。根石第Ⅰ群の柱間寸法は、梁行2間、10尺等間、桁行1間、14尺である。なお、梁行については『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』(以下、『資財帳』と略記する)に「広三丈」と記されていることから、さらに梁間10尺で1間分東へのびていたものと考えられる。根石第Ⅰ群については、掘形を有するものと、掘形のないものとの間に修復あるいは改築による前後関係があるかもしれない。

根石第Ⅱ群は、発掘区の東端で南北に並ぶ2ヶ所を検出した。いずれも根石を配置するための掘形があり、掘形の規模は各一辺0.5m、0.7mである。根石は丸味の強いこぶし大の自然石である。桁行の柱間寸法は14尺で、根石第Ⅰ群の桁行寸法と等しいが、根石第Ⅰ群の柱筋とは1.2m東へずれている。梁行については対応する根石を残していないためわからない。根石第Ⅰ群と根石第Ⅱ群とは、桁行寸法は同じであるが柱筋が一致せず、おそらく梁行寸法につい



第10図 発掘遺構図

ても異なるものと思われる。また、その規模からは根石第Ⅰ群が古く、根石第Ⅱ群が新しいであろう。

### (2) 西中房基壇

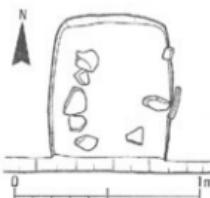
発掘区中央やや西寄りで、西中房基壇西端にあたる南北方向の落ち込みを検出した。基壇外方の西側は、現存する基壇の上面から約0.1m低い平坦面で、発掘区西端には瓦の小片を混えた小礫が密集しており、石敷の痕跡と考えられる。基壇外構は本来、澁灰岩切石によってなされていなかったのであろうが、基壇外構や雨落溝の痕跡は残存していない。このため、基壇の出については正確な寸法が不明である。しかし、今回検出した基壇西端と根石第Ⅰ群西柱列との距離が1.9mであり、ほぼ7尺(2.1m)であったと推測される。東西トレンチでは、相当深くまで後世の搅乱を受けていたが、中央やや西寄りで幅0.4m、深さ0.1mの浅い素掘りの南北溝を検出した。この溝は根石第Ⅰ群の推定東柱列から東1.6mの距離にあるので、基壇東地覆石抜取痕跡とも考えられる。

### (3) 旧地表面

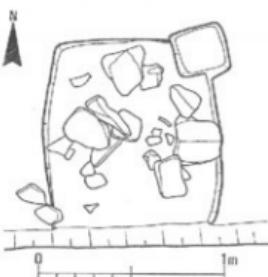
土層の堆積状況を知るために、発掘区西南隅と東西トレンチを深く掘り下げた結果、この2ヶ所で大安寺創建以前の旧地表面を確認することができた。

発掘区西南隅では、現地表下1.4mで灰色粘土層となる。この灰色粘土層の上面から木材の削り屑と共に少量の土器と軒平瓦1点が出土した。旧地表の灰色粘土層の上には、赤褐色砂層、暗褐色バラス層、黄色粘土層等が堆積する。これらは大安寺造営時の盛土整地層である。

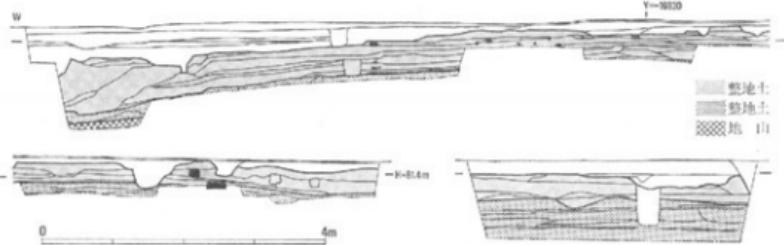
東西トレンチでは、現地表下1.1mで灰黒色粘土となり、この層の上面でも木材の削り屑が少量出土した。この灰黒色粘土層が発掘区西南隅検出の灰色粘土層とつらなり、旧地表面は東が高く西に低い緩傾斜であったとみることができる。なお、この地点では、厚さ約0.5mの盛土を行なって水平にならした後に澁灰岩粉末を敷きつめ、さらに盛土を行なっている。



第11図 根石第Ⅱ群



第12図 根石第Ⅰ群



第13図 南 熊 土 層 図

## 2 遺 物

### (1) 土 器 (第14図、図版7)

大安寺創建以前の旧地表面、中房基壇土、東西トレンチの南北溝から奈良時代前半期の土器が、寺地造成時の盛土中から少量の土師器、須恵器、円筒埴輪が出土した。

旧地表面出土土器 旧地表面で土師器皿、須恵器蓋が出土した。

土師器皿 (38・39) は、平坦あるいはわずかに丸い底部と短い口縁部からなり、端部内側には沈線が1条めぐる。底部内面をなで、口縁部内外面を横なでし、底部外面は調整しない。38は口径11.0cm、高さ2.1cm。39は口径10.8cm、高さ2.5cm。

須恵器蓋 (47) は頂部破片で、外面はヘラ削りのものになでて仕上げている。口径16.4cm。基壇盛土出土土器 基壇盛土中から須恵器蓋・鉢が出土した。

須恵器蓋 (45) は平らな頂部と垂直な短い縁部からなり、宝珠つまみがつく。口径5.7cm。

須恵器鉢 (48) は鉄鉢形の土器で、口縁部端部はひらたく、端面は内傾する。口径20.0cm。

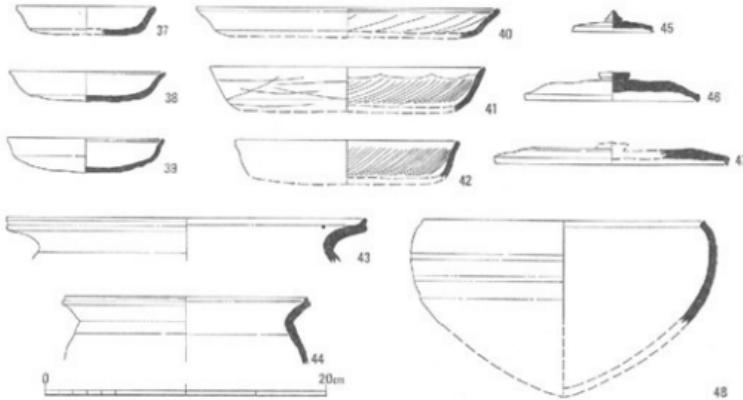
南北溝出土土器 南北溝から土師器杯・皿・壺、須恵器蓋が出土した。

土師器杯 (42) は口縁部破片である。内面には一段の斜放射暗文がある。口径約16cm。

土師器皿 (40・41) には口縁端部を巻き込むもの (40) と、巻き込まずまっすぐおわるもの (41) がある。いずれも底部外面をヘラで削り、41の口縁部外面には粗いヘラ磨きがある。40の内面には粗い1段の斜放射暗文、41の内面には1段の斜放射暗文と連弧暗文がつく。37の口縁部には煤が付着し、灯明皿に用いられている。口径9.8cm、高さ2.0cm。

土師器壺 (43・44) はいずれも口縁部破片である。43は口径17.0cm。44は口径25.4cm。

須恵器蓋 (46) は平坦な頂部とわずかに眉曲する縁部からなり、低い宝珠つまみがつく。内面は平滑で、硯として用いられている。口径12.2cm、高さ2.0cm。



第14図 土器 (37~44 土師器、45~48 須恵器)

(2) 瓦 (第15図、図版8)

出土の瓦類は丸・平瓦若干と軒丸瓦3点、軒平瓦2点、熨斗瓦2点である。

6は内区に複弁8弁蓬華文をおく。中房はまるみをおびる。弁区はわざかにもりあがりを示す。間弁は長く伸び、界線のように蓮弁を区画する。外区を欠失しているが、同型式の平城宮所用瓦でみると外縁に線鋸齒文を、内縁に珠文をめぐらす。7は外区内縁に珠文6個を残す小片である。外縁に線鋸齒文をかすかに認めることができる。大きさ、珠文の間隔からみて、付表一軒丸瓦1に示す小型軒丸瓦である。8は内区に巴文をおき、外区に珠文をめぐらせていている。巴文の頭部は大きく、尾部は内外区を画す圓線に接する。珠文帯と外縁の間には圓線はない。外縁は幅広い。近世のものである。

10は均整唐草文軒平瓦である。西中房基壇粘土の下、灰色粘土の旧地表上面から出土したもので完全品である。瓦当の最大幅34cm、長さ45.7cmある。段彫である。平瓦部凸面はほぼ全面範削りし、平瓦先端部に継位の繩叩き痕を残す。凹面は四周のみ範削りし、布目压痕をよく残している。また、3.5~4.0cm幅の粘土紐の痕跡をみることができ、平瓦部が桶巻作りによったことを示している。9は文様構成が10とよく似ているが、細部で異なっており、とくに唐草文各単位の巻込みが4より大きい。4・5ともに大官大寺から出土するものと同範品である。

熨斗瓦(図版8-11)は、一辺12.3cm、厚さ1.9cmで板状を示す。1面に繩叩き痕を残し、他面は切断時の切り口とともに生乾きの段階で打ち割った割り口を残す。全く板状で、通常見られる平瓦半数の熨斗瓦とは形態を異にする。今迄この種の瓦は遺構の一部として見出されたことがなく、他の瓦類と共に出土している。平瓦と似た厚さからみてここでは熨斗瓦と考えた。



第15図 軒 瓦

### 3 大安寺伽藍配置図について

大安寺については、昭和29年以来、南大門、中門、講堂、鐘楼、西太房、西中房、北東中房、井屋、南大門脇の宿直屋、その他の発掘調査が行われてきた。これらの調査結果が『資財帳』に記された堂塔規模とはほぼ一致することが確認された。そして、これらの調査結果や『資財帳』の記事から、諸先学によって大安寺伽藍配置の復原がなされてきた。

大安寺西僧房については、昭和38年に奈良県教育委員会が行った調査によって、太房の桁行と中房の桁行とが等しく、かつ太房の桁行が14尺であること、太房の梁行柱間が13尺等間、中房の梁行柱間が10尺等間であることが確認されている。また、ここで検出された穴のうち東南端の1ヶ所が、昭和49年に奈良国立文化財研究所によって再発掘されている。この昭和49年検出の太房柱位置は、今回検出した中房位置の北14尺の位置にあたる。また、昭和49年のこの調査では、鐘楼と、その隣庭も同時に検出されている。

一方、大安寺中門脇の廻廊は、西端で西太房につながると想定されており、昭和49年検出の太房東端の柱位置と、昭和29年の発掘で検出された中門西廻廊西端の柱位置とは、ほぼ真南北の方向にとおっている。

その他、奈良県教育委員会が行った76-2次調査では、北東中房の根石列が検出されており、主要伽藍外の苑院、花園院と想定される地区でもいくつか調査されている。

こうした発掘成果と、『資財帳』記載の堂塔規模を考えあわせて、今回大安寺伽藍復原図を新たに作成した。なお、ここでは食堂を北僧房の北側に想定したが、これは『資財帳』における堂塔の記載順序が、東南隅から北へ時計まわりに記されているとする村田説<sup>(註)</sup>にのっとっている。ただし、奈良県教育委員会が、76-3次調査として行なった東僧房東方の発掘調査で礎石根石列が検出されており、食堂の位置の決定は今後の調査に期待される。

(註) 村田治郎「薬師寺と大安寺の占地」(『史迹と美術』二四〇、1954年)

第1表 資財帳にみえる堂塔規模

堂塔名	長	広	高	堂塔名	長	広	高
金講堂	11丈8尺	6丈	1丈8尺	宿直屋	1丈3尺	8尺3寸	
食堂	14丈6尺	9丈2尺	1丈7尺	南大門脇	2丈4尺	1丈	7尺5寸
経堂	14丈5尺	8丈6尺	1丈7尺	中門脇	1丈4尺	1丈	8尺
鐘樓	3丈8尺	2丈5尺		講堂院一	6丈3尺	2丈	
鐘樓	3丈8尺	2丈5尺		一	5丈2尺	1丈3尺	
食堂	前廊	55尺	1丈3尺	一	5丈	2丈	
講堂	廊	2丈7尺	1丈4尺	一	7尺(丈)	4丈	
鐘樓	廊	2丈7尺	1丈4尺	僧房	6丈3尺	3丈8尺	1丈4尺
講堂	東西廊	9丈	1丈	三口	5丈	2丈	
講堂	北廊	5丈2尺	1丈8尺	一	10丈8尺	1丈8尺	
食堂	廊	9丈2尺	1丈8尺	一	4丈	1丈5尺	
東西太房	南列	27丈4尺5寸	2丈9尺	寮廊	4丈	1丈2尺	
東西太房	北列	24丈5尺	2丈9尺	大衆院	22丈	5丈	1丈1尺
東西中房	南列	27丈4尺5寸	3丈	一	11丈4尺	7丈2尺	1丈8尺
東西中房	北列	29丈1尺	3丈	寮廊	7丈7尺	2丈8尺	1丈6尺
北太房	12丈5尺	3丈9尺	1丈5寸	井戸屋	7丈7尺	3丈	1丈4尺
北中房	27丈	3丈	1丈1尺	井	5丈	2丈	
小子房	南列	10丈	1丈2尺	政所院	7丈	4丈	1丈4尺
東小子房	29丈1尺		9尺	一	5丈	3丈	1丈1尺
井屋(並六角)	1丈		9尺	倉	9丈	5丈	1丈3尺
				二	4口		

## 4 まとめ

大安寺は、聖德太子建立の熊野村の道場に始まり、舒明天皇の11年（639）には百濟川の邊に九重塔をもつ大寺（百濟大寺）になったという。しかしその直後に火災にあい、皇極元年（642）に造寺の詔がだされて、宸撫天皇の時代に造営はほぼなったと考えられる。天武2年（673）、百濟大寺は高市地に遷され（高市大寺）、6年には寺名を大官大寺と改められた。なお大官大寺跡は藤原京左京十条四坊にあり、出土遺物も藤原宮の時代のものに限られることから、当寺跡は高市大寺までは遡らないともいわれる。和銅3年（710）、平城京への遷都とともに、諸大寺は新京に移された。大安寺の造営については諸説あり、そのうちで、『続日本紀』の「雲龜二年（716）五月辛卯、始徒迎元興寺于左京六条四坊」の記述の「元興寺」は大安寺の誤りとする説が妥当である。また『扶桑略記』に大官大寺は藤原宮とともに和銅4年焼失したとあり、『資財帳』には大官大寺から大安寺に移した仏具經典等がみえることから、平城遷都直後から造営が始まっていたことが裏付けられよう。天平年間にいたり、渡唐僧道慈の差配により改造が行われ、天平末年には塔院を除いて、主要伽藍はほぼ完成した。なお東塔も天平神護2年（766）までには建立されて、それ以後、寺運は栄えた。平安時代中期にいたり、延喜・天暦期に講堂・僧房・西塔を焚し、また寛仁元年（1017）には多くの諸堂も焼失し、再興もなされたが、次第に衰微したようである。

今回の調査は小規模であったが、大安寺西中房の根石列と基壇を検出するとともに、大安寺創建以前の地表面・整地層を確認し、僧房復原および造営事実に関する貴重な資料を得た。

西中房については、昭和38年に奈良県教育委員会が行った調査により、前後2期の建物があり、前期は梁行3間、各10尺等間、後期は梁行4間、各8尺等間であることが明らかにされている。今回の調査でも同様に2期にわかれ、前期建物は前回調査で分らなかった桁行柱間（14尺）と基壇東西幅（44尺）が明らかになった。この建物は桁行柱間を21間（294尺）にとると『資財帳』の西中房北列とはほぼ一致し、前回検出分と合せてその位置は西中房北列の南端三間に当るものと推定した。後期建物は2ヶ所に礎石据付跡をとどめていた。残存状況が悪く、平面形式を明らかにすることができなかった。この後期建物は寛仁元年（1017）火災後に再建された西中房（『巡礼私記』）にあたるものであろう。

調査区西端部の一部掘下げによって、大安寺創建以前の地表面および盛土整地層を確認したことは大きな成果であった。旧地表面は現地表下1.4mの灰色粘土層で、この地区では1m以上にわたって盛土整地をおこない、さらに基壇部分に盛土をしたことがうかがえる。灰色粘土層上面には大官大寺式の軒平瓦・奈良時代前半期の土器・木材の削り屑が堆積しており、これらは大安寺造営に関連する遺物とみることができる。

大官大寺式瓦は南大門、中門地区、講堂地区、北東中房地区でも出土しており、その形式・技法・焼成状況からみて大官大寺所用の再使用瓦と思われる。大官大寺の調査では中門・回廊が未完成のまま焼失した状況で検出されているように、新京移転に際して建築途上の瓦を転用したものと考えられる。

## 付表 大安寺出土瓦数量表

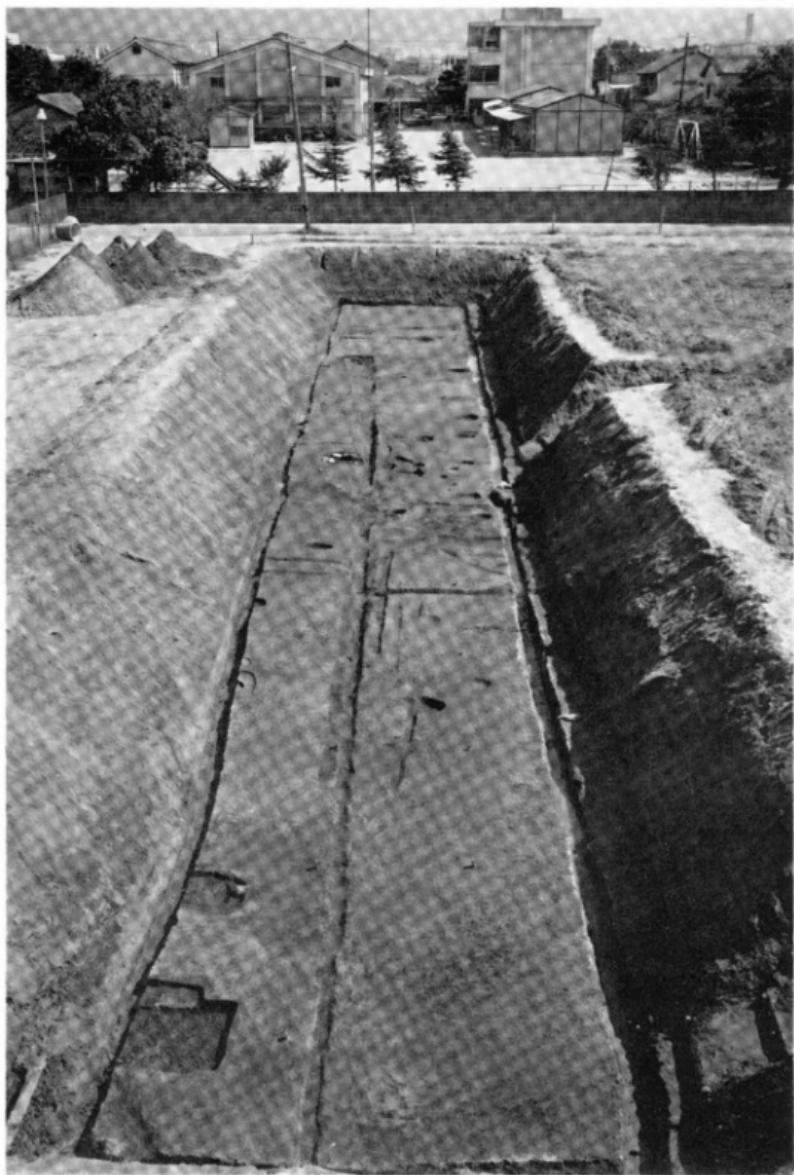
	南門地区	大門地区	中門地区	講堂地区	東北僧房地区
1				1	7
2				19	6
3			1	10	2
4					1
5			3	5	2
6			1	5	
7					
8			1	2	
9					2

南大門地区 中門地区 講堂地区 東北僧房地区

1		1	
2		1	
3			2
4		1	18
5	3	5	8
6	1	1	2
7		1	2
8	1	8	3
9	4	50	46
10	1	7	2
11	8	2	2

### 大安寺略年表

617	推古25	聖德太子、熊藏村に精舎を建てる(扶桑略記)。
621	29	太子病み、熊藏精舎を朝廷に獻する(略記)。
639	舒明11 7	百濟川のほとりに大宮と大寺を造作する。西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直異を大臣とする(日本書紀)。略記では1月、大安寺碑文・大安寺資財帳では2月のこととし、ともに熊藏精舎を移して百濟大寺を建つある。
	12	百濟川のほとりに九重塔を建てる(書紀)。寺塔焼失する(略記)。
642	皇極1 9. 3	詔して近江と越の丁を徵発し、百濟大寺を造らせる(書紀)。
673	天武2 12. 17 2	小紫冠御野王、小諸下紀臣阿多麻呂を遣高市大寺司に任命する(書紀)。 百濟大寺を高市郡に移す(資財帳・東大寺要録・三代実録)。
677	6 9. 1	高市大寺を改めて大官大寺と号す(資財帳)。
701	大宝1 7. 27	造大安薬師二寺の官は寮に准じ、造塔丈六の二官は司に准ず(統紀)。
702	2 8. 4	正五位上高級朝臣並間を造大安寺司に任す(統紀)。
710	和銅3	大官大寺を平城京に移す(碑文・大安寺縁起・略記・東大寺要録)。
716	靈龜2 5. 16	元興寺を左京六条四坊に移し建てる(統紀)。
727	神龜4 9	H本靈異記上巻第三十二に「大安寺丈六」「南門」「鐘」などあり。
729	天平1	道慈の差配のもとに大官大寺を改造する(碑文・縁起・略記・要録)。
745	17	大官大寺を大安寺と改める。俗に兩大寺という(略記・縁起・七大寺巡礼私記・要録)。
746	18	菩提僧正大安寺東倉僧坊南端小子坊に住む(略記)。要録供養章第三大安寺菩提伝来記では「中院」とする。
766	天平2 神龜2 12. 28	大安寺東塔ゆれる(統紀)。
807	大同2 8. 17	八幡大菩薩を宇佐より移し、大安寺の行教の本房の東室第七院石清水房に安置し、次いで塔中院(八幡宮)を建立する(大安寺塔中院建立縁起)。
859	貞觀1	大安寺大塔院を建立する(大安寺塔院記)。
895	寛平7 8. 5	寛平縁起作られるといふ(寛平縁起)。
911	延喜11 5	講堂三面僧房焼く(一代要記他)。
949	天暦3 11. 11	大安寺西塔雷火のために焼失する(日本紀略・略記)。
1017	寛仁1 3. 1	大安寺焼失する。塔婆と枳迦像一軸のみ難を免る(紀略・略記・古練抄)。
1018	2	造大安寺長官以下を任命する(紀略・左経記)。
1028~	長元年中	大安寺造営なる(醍醐雜事記・左経記・小右記)。
1041	長久2 9. 13	大安寺焼失する(略記)。
1076	承保3 12. 18	宝殿一字、三重塔一基焼失(大安寺崇道天皇御院八島兩处記文)。 金堂・東西樂門・中門・廻廊・七重塔・倉・西大門・東大門など修造し、また西大門・僧房などを修造する(官宣旨案・平安憲文1331号)。
1087~	寛治年中	



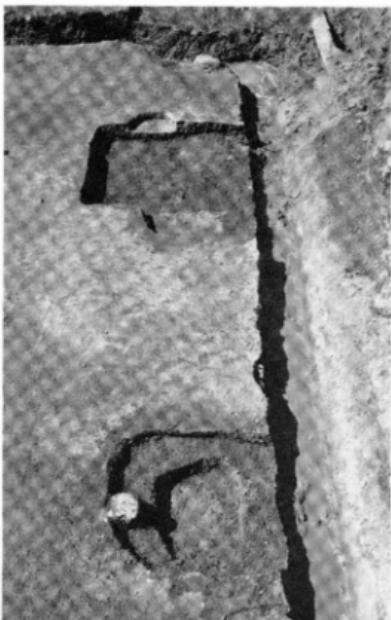
左京六条三坊十四坪 発掘区全景

(西から)



1 建物S B1622

(東から)



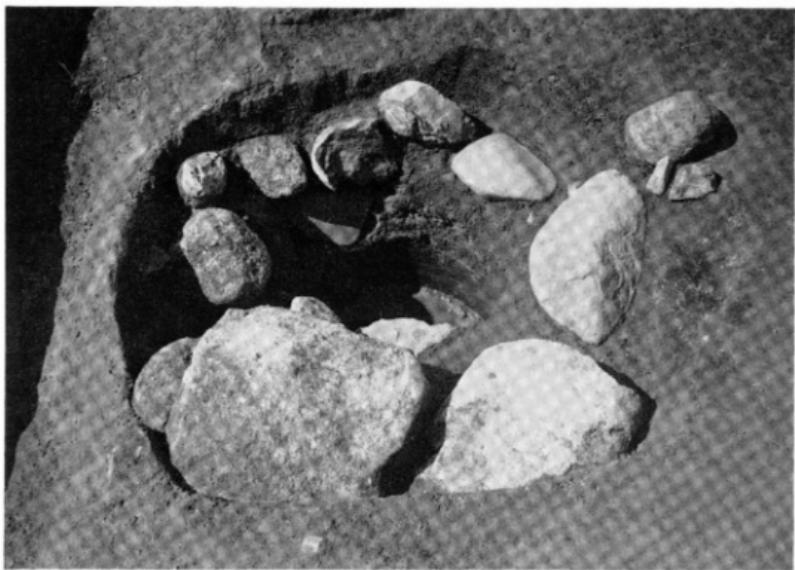
2 建物S B1621

(東から)



3 土塀S K1624

(東から)



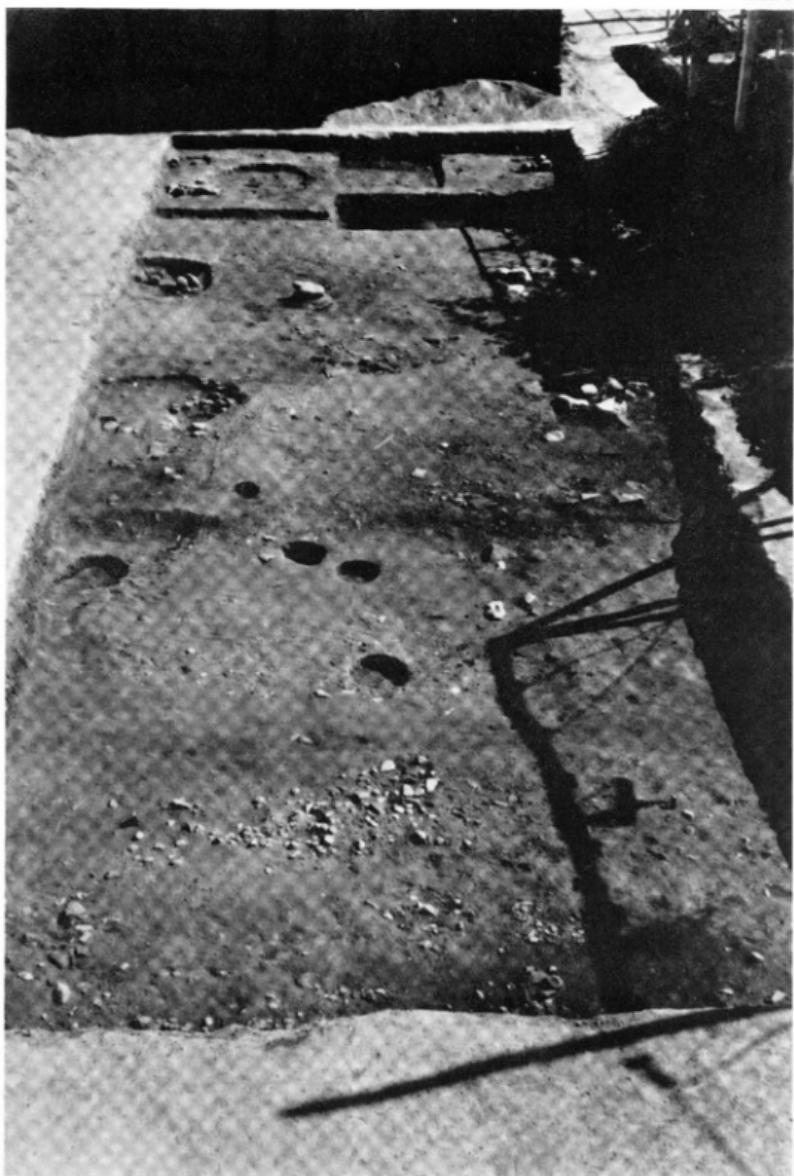
1 井戸 S E1623

(東から)



2 井戸 S E1623細部

(西から)



大安寺西中房 焼損区全景

(西から)



1 癸抜区全景

(北から)



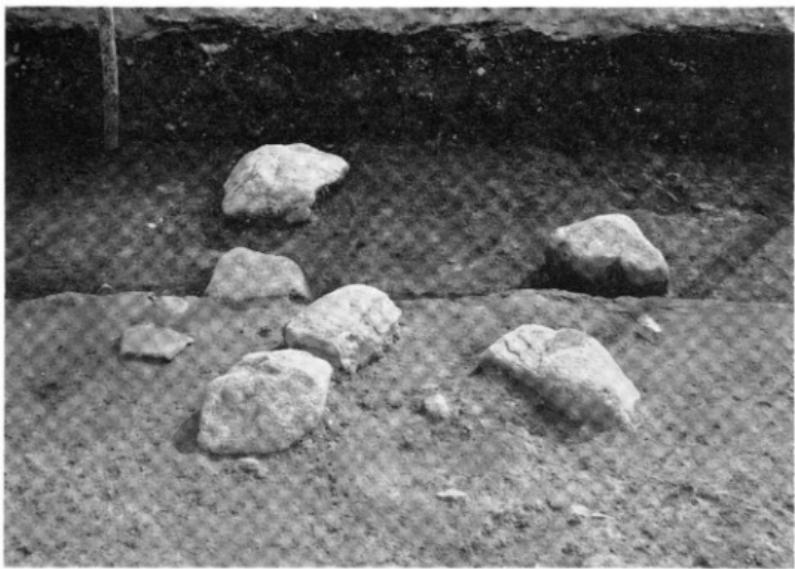
2 南側根石列

(西から)



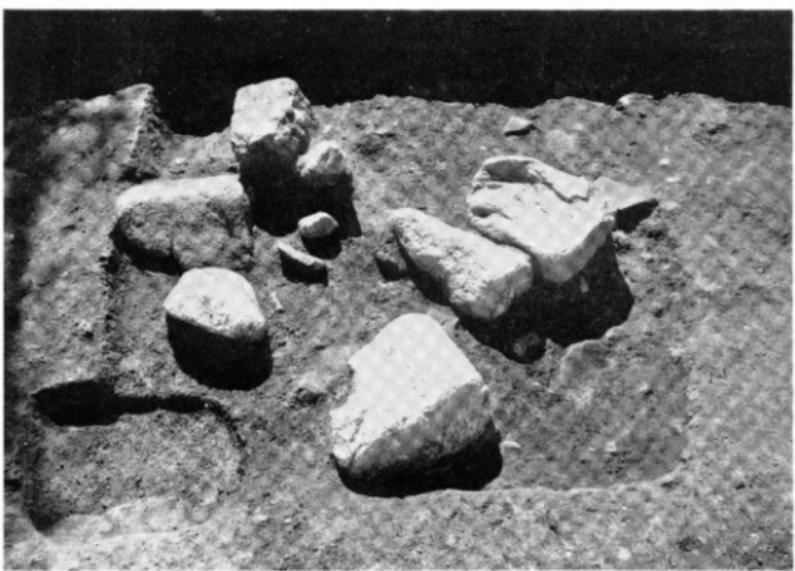
3 北側根石列

(西から)



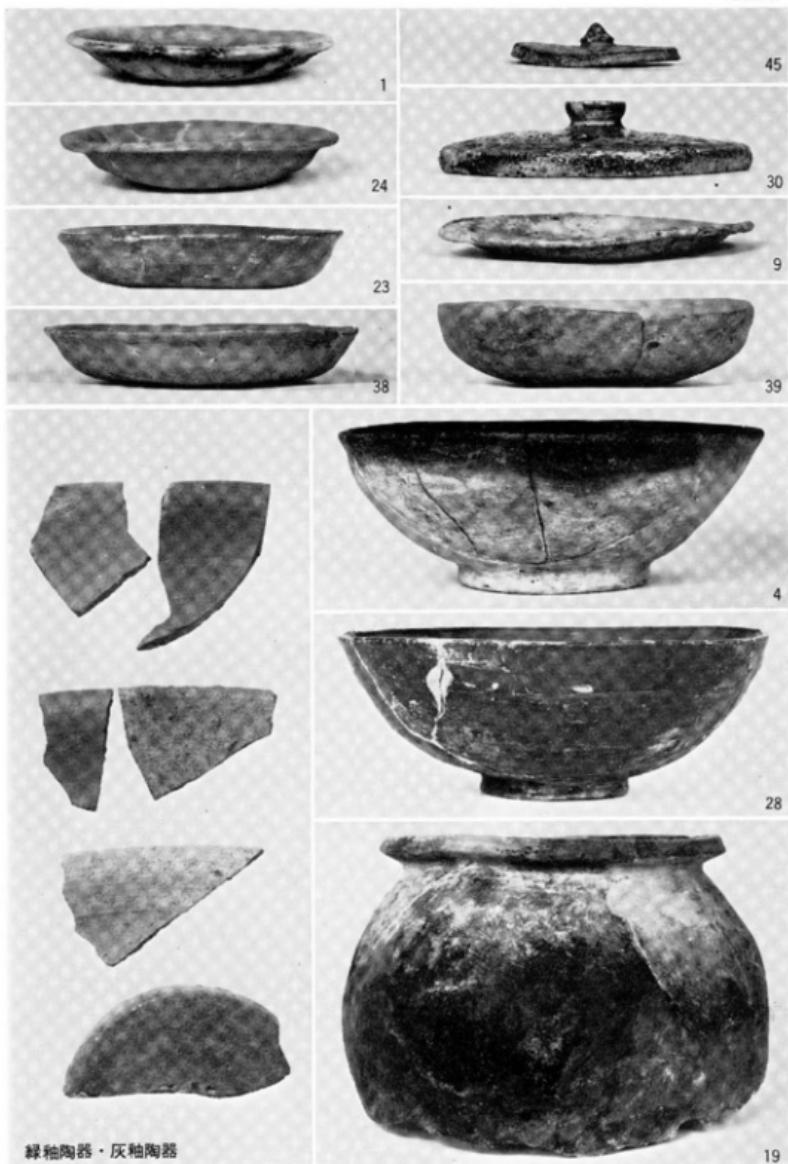
1 根石第Ⅰ群南列西 2

(北から)

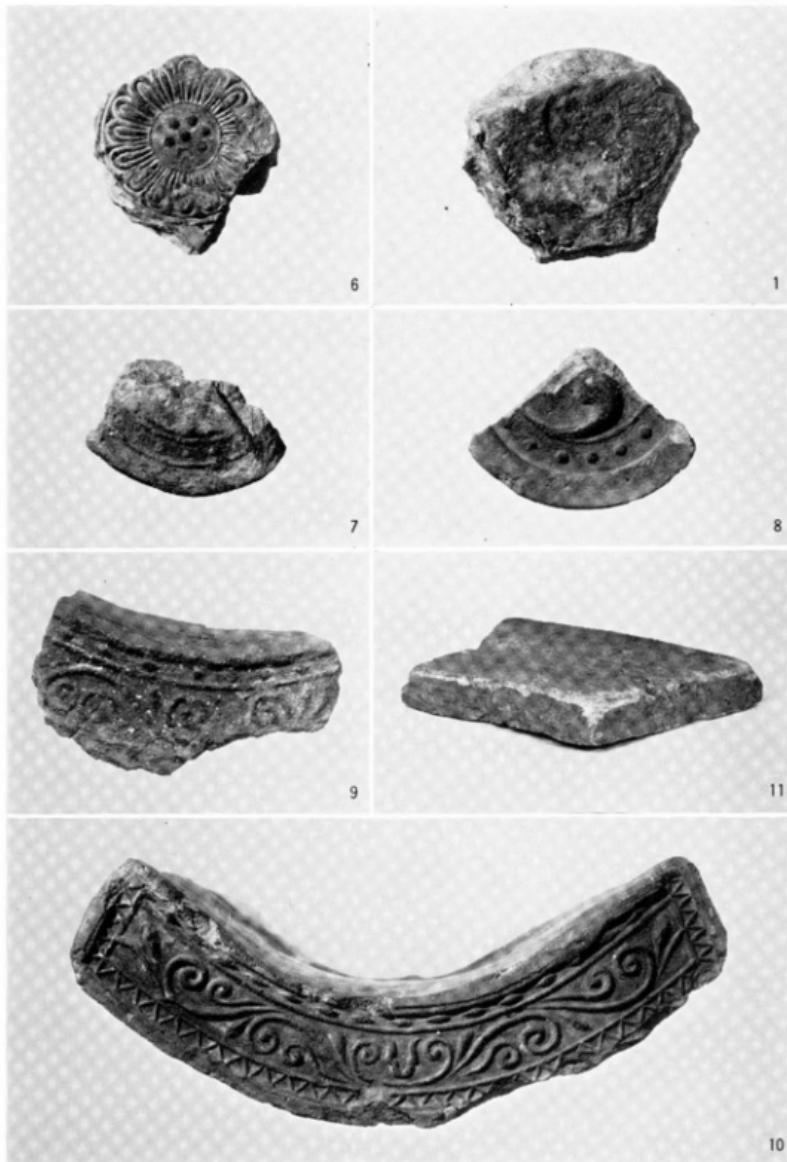


2 根石第Ⅰ群南列西 1

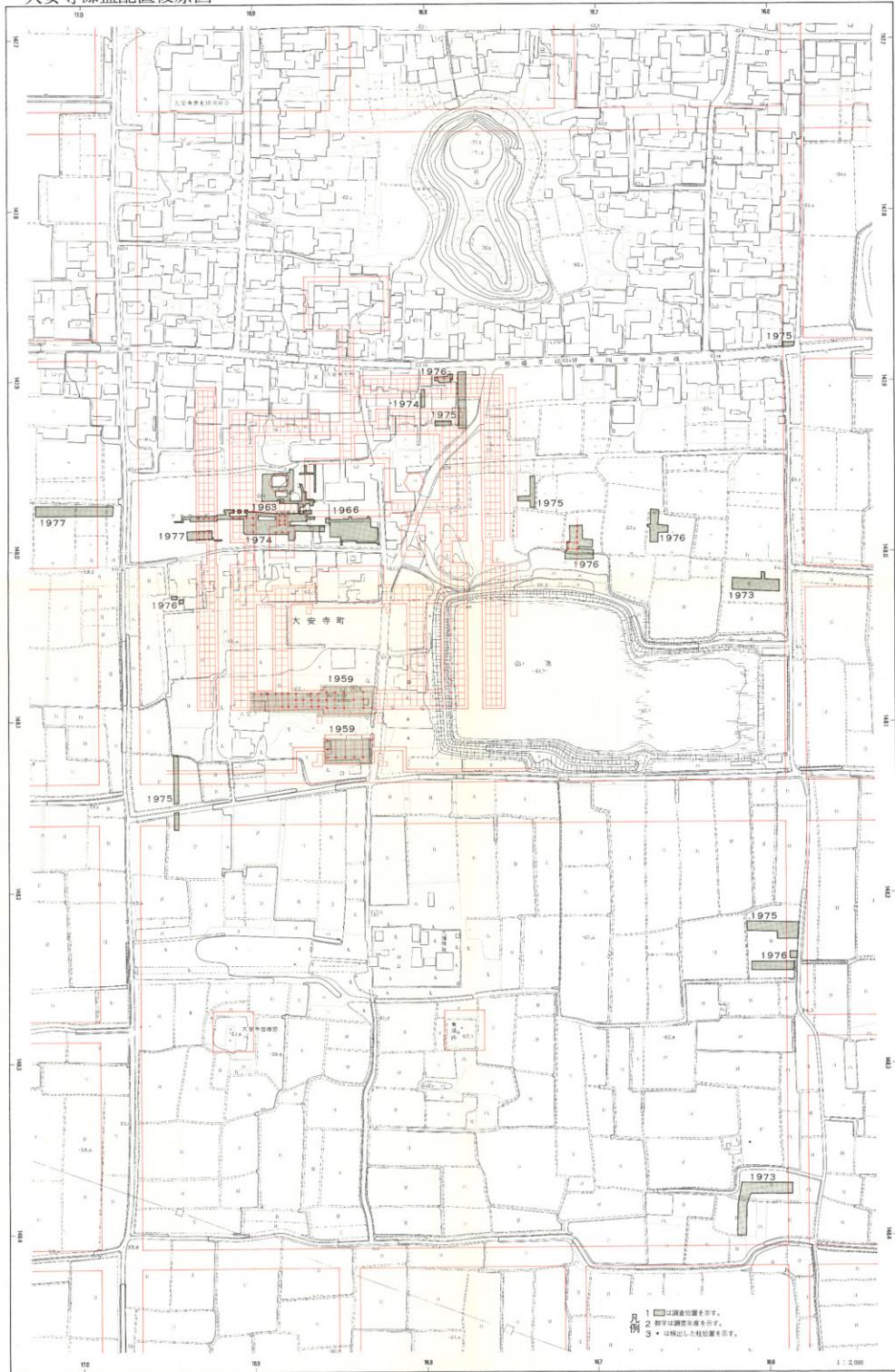
(北から)



緑釉陶器・灰釉陶器



# 大安寺伽藍配置復原図



昭和53年3月27日 印刷  
昭和53年3月31日 発行  
平城京左京六条三坊十四坪  
発掘調査概報  
編集 奈良国立文化財研究所  
発行 奈良市教育委員会  
印刷 共同精版印刷株式会社

